

岩倉 さやか（国語学・国文学）

花と自己変容  
—世阿弥能楽論研究—

本論文は、日本文芸の中心を貫いて流れる風雅の精神の象徴として、常に最初にあげられる「花」について、その観念の具体的なありようを説明するための試論である。「花」「月」については、それが近世文芸においては特に俳諧連句の月花の定座のありようからしばしば式目上の扱いをめぐって論じられてきた。その議論は、さまざまなレベルで繁簡多様に行われた。そして、俳諧の源流をたどる意味で、右の議論に対して中世連歌論を示して、論を展開する試みも当然行われてきたが、しかしそれらは貧困な論理のすり合わせに終始するのみで、成果に乏しかった。

本論文の立揚は、中世芸能の最大の達成である「能」の完成者世阿弥が残した能楽論の中で、しばしば、そして綿密に語られる「花」に着目し、能の「花」を語るべく世阿弥が到達した芸術伝達の理論を詳細に分析し、それが、究極的には人の精神の深奥と存在の根拠に立脚していることを、その実際的なありかたまで含めて論じ明かし、やがてそれが時代をとびこえて貫流する人の心の営みとも一致すべき展望を描き出そうとするものである。

第一章では、能が実現する成立の場をめぐって、世阿弥が「序・破・急」と区分してした能楽構成のアイデアが、存在の始源に対する徹底した受動性をスタートとして、やがてそれが反転否定に転ずるところにさまざまな演能の態（わざ）が演ぜられ、最終的には全一的な究極に急激に統一せられて行くという独自のアイデアと実際的な演能を経験的に思索しまとめた舞台芸術の本質を述べるものであることを説明する。

第二章では、「態」に具体化される「心」のあり方について、能の全体構造が、一瞬一瞬の個別の「態」においても基本的に必ず息づいてあるべき理由を追究して説明する。存在の始源にある造物主の無限な働きは、演者主体の肉体は無論のこと、舞台の如き空間においても捕捉することができない。それができるのは「心」のみであり、ひとの「心」なればこそ具体化することが可能になるのであると説く。この論證に到達することによって、能が漸く時空を超えて普遍的な芸術になったのである。

第三章は、「心」のはたらきから一瞬現出した舞台の「花」が、いかにすればその存在を証明されるか、という本論文の中心的課題が追究される。いうまでもなく造物主の無限な存在が、人間という現世の有限な存在に、時空を超越して現出し続け、存在することはあり得ない。特に時間の前で徹底して受動的、敗北的なものである「ひと」が、一瞬実現した「花」—造物主の精華—を、持続して保つことはできない。否、かりに一瞬たりとも「花」は存在して舞台に咲いたのか。この難関を突破するために、世阿弥が用いたのが「なみ（無化）する」という自己客観化、自己否定の論理であった。自己を否定して飛躍することを通じて、始源の存在ではない一己の人間が、瞬間的に時間を超越し、さらに自（演者）他（見者）二重の視座を獲得することにおいて空間を超越するとき、一瞬「花」は咲くのであるが、その瞬間にこそまた重ねて自己否定は要請されるのである。かくて有限なる舞台の上に「花」は、演者の絶えざる自己変容という犠牲をとれないながら、わずかに咲くことができる。

本論文は、表章氏の研究の成果である日本思想大系本『世阿弥・禅竹』の本文を存分に利用して、この間の諸先学の論文をも十分に参照しつつ、表氏の本文提供以来三十年余にして初めて世阿弥能楽論の基本的構造を説明したものであり、論証の手続きも極めて着実かつ誠実である。結論は明確に近世の芭蕉の俳論の立場に通底するものを持ち今後の展開が期待される。本委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。